

今回ご登場頂く大ベテランは、およそ半世紀にわたって
 グラスルーツモータースポーツを支えてきたMr.ダンディだ。
 サーキットトライアルを創設期から支えてきた
 アイデアマンの話に耳を傾けよう。



Aライセンス講習会講師
稲村政幸

凄腕！ オフライン シャン ルズ

第7回

関 東のモータースポーツ愛好家なら一度は行ったことがある茨城県の筑波サーキット。40年を超える歴史を持つ、この関東が誇る老舗サーキットは4輪レースはもちろん、近年はサーキットトライアルのメッカとしても知られており、Aライセンスが1日で取得できる「サーキットトライアル付き講習会」も盛んに開催されている。

サーキットトライアル主催の傍ら、こんなユニークな発想のAライ講習会を定期的に開催しているのが東京のJAF加盟クラブである「チームマゲナスオートクラブ（略称TMAC）」だ。代表を務めるのは、ダークな背景にド派手なワイシャツと漆黒のサンングラスがトレードマークの稲村政幸。御年72にして各種講習会で特別講師として教鞭を執る、筋金入りのベテランオフラインとして知られている。

これまで様々なV番組で芸能人の競技ライセンス取得に協力してきた実績もあり、モータースポーツの世界では全国ネットの知名度を誇る人物だが、元々はドライバーの出身。1970年代にはナンバー付きの510ブルーバードを駆り、自ら編み出したスピントーンを武器に関東シムカーナ界を席巻した名手なのだ。

「競技をやり出したのは25歳と遅かったんだけど、それまではクルマ自体にも興味がなく（笑）。たまたま友人に連れられて行った富士で初めてツーリングカーレースを見て『これならオレのほうが速い！』なんて思ったのがそもそのキッカケ。すぐにAライを取ってレースをやるうと思っただけど、

当時はクルマ自体が高くて改造費も高額だったから、Bライでできるジムカーナを始めたんです。ノーマル仕様でも戦えるジムカーナが流行り出してからは、いいトコまで行けるようになったからハマってしまいました。当時はTACS（東京自動車クラブ）に所属して、鈴木正吉代表と一緒にジムカーナ発展のために新しいことを色々試してみたりもしました」

やがて稲村は公認審判員の資格も取得。ラリーの主催も経験するようになる。同時に、昔から憧れだったレースでドライバーデビューも果たした。「仲間も増えてきたので1983年に自分のクラブ（TMAC）を立ち上げました。でもエントラントチームというだけでは長く続かないだろうと思ったので、主催もやるクラブにしたいんです」

稲村はTACS時代に培ったノウハウで自ら文字通り旗振り役となり、関東各地でBライセンス講習会や公認ジムカーナなどを開催。筑波のジムカーナ場が現在地に移転した際には、こけら落としの大会も主催した。Aライセンス講習会の開催を始めたのは1990年代の半ばから。バブル期、急増したBライホルダーの中からAライも取得したいという声が高まったことに対応するためだった。当時始まったばかりのサーキットトライアルをAライ講習会に組み合わせる稲村達の試みは徐々に浸透していくことになる。

「Aライを取るためにジムカーナを2回完走するという実績が厳しいと感じていた人達にとっては、ミスコースしないサーキットトラ

イアルは受け入れやすかったんでしょね。結果的にレース入門への敷居を下げた形にはなったかもしれない」
 以来20年にも渡り、ライセンス人口が減少の一途を辿った時期も稲村は一貫して、サーキットトライアル付きAライ講習会を開催し続けてきた。ナンバー付きレースの人気もあって、稲村達のAライ講習会は平日でもコンスタントに参加者を集めているという。

「最近では年輩者の方の受講も増えていきます。子供が独り立ちして一段落した人達が昔見た夢を追いかけ始めてるんじゃないかな。いい傾向ですよな。講師を続けるというのは、僕自身にもボケ防止に役立ってってくれてる（笑）。クルマを運転できる限りはサーキットに通いたいね」

モータースポーツ入門の最初の入口に立った受講者にとっても、この鮮烈なルックスはちよつとやそつとでは忘れない、いい思い出になるはず。まだまだ、ご活躍、期待しています。



かつてはシリーズ賞典でグアム旅行に行ける「TMACグアムシリーズ」も主催し、大好評を博した。稲村は根っからのアイデアマンだ。「どうせ講師をやるのならお洒落に決めたい」と4,5年前からはド派手なスーツ&ネクタイが定番だ。